

現地フォーラム「BSE に負けないぞ！ 第 1 弾—放牧で牛乳を—放牧成功の必要条件—」

## 1. このフォーラムのねらい

北海道草地研究会事務局（酪農学園大学）・松中照夫

### 1. 草地酪農の体質的変化の経緯

北海道の草地酪農発展の歴史をみると、1960年代から70年代にかけて爆発的な草地開発がおこなわれ、草地面積が急増したことがわかる（図1）。乳牛頭数の増加は草地面積の増加に対応し、草地面積の増加が鈍ると、乳牛頭数の増加も鈍化している。それゆえ、単位草地面積当たりの乳牛飼養頭数は、75年以降、ほぼ1.6頭/haに維持されている。牧草収量もほぼ一定水準であるから、1頭当たりの牧草給与量も大きな変化がなかったと考えられる。しかし、同じ時期の1頭当たり乳量だけは急速に増加し、その勢いは止まろうとしていない。

個体乳量の増加が単純に飼料だけに依存するのではなく、乳牛の遺伝的改良への努力の成果も含まれることは、疑問の余地はない。しかし、ここで重要なことは、その遺伝的改良方向が、飼料として何を期待し、その飼料に依存した乳牛の管理を考えていたかである。牧草生産量との対応のないこの乳量の増加は、おそらく、この時期に進行した購入濃厚飼料費が他の生産資材に比較し、相対的に安価となっていったことと無関係ではないだろう。すなわち、

### 2. このフォーラムでのねらい

飼料自給に対する考え方は、乳牛の飼養条件が放牧と貯蔵飼料に依存する場合と、通年を貯蔵飼料に依存する場合とで大きく異なる。この中で放牧は、「環境にやさしい酪農」として重要視されている。しかも、放牧の利点として1) 家畜管理と飼料給与、ふん尿処理の面で省力的であること、2) 放牧によってしか利用できない土地からの飼料資源の活用ができ、飼料自給率の向上に寄与できること、3) 放牧家畜による国土管理、景観形成要素として地域社会に重要な意味を持つことなども指摘され、積極的に放牧推進の動きが出てきている。

北海道は、わが国では特異的に土地資源に恵まれている。このため、放牧導入に有利な環境が備わっている。ところが、北海道でその放牧という飼養形態が衰退の一途をたどっている。牛舎まわりの放牧地で生産された牧草は、まぎれもない安心できる飼料である。それにもかかわらず、そ

購入濃厚飼料に依存した牛乳生産がこの1975年以降急速に増加したことが伺える。

購入濃厚飼料への依存度の高まりは、相対的に酪農場で生産される自給飼料の飼料価値に対する関心を薄める。しかも、酪農場の系外から持ち込まれた飼料に含まれる栄養分は、家畜のふん尿となって酪農場に蓄積し、場合によっては環境汚染物質になりはてる。こうして次第次第に、土地基盤に根ざした草地酪農の特徴が薄められていった可能性がある。

このような購入濃厚飼料依存体質の酪農が、昨年9月、わが国初のBSE（牛海綿状脳症）発生の誘因となった可能性は否めない。もちろん、その原因が特定されたわけではない。しかし、自給飼料の安全性は自分で把握できるのに対し、購入飼料には安全性に不安が残る。この不安と、これまでの草地酪農が歩んできた購入濃厚飼料依存体質への動きは、無関係でないと思う。今こそ、飼料自給への道に方向転換をはかり、土—草—牛を巡る養分循環に根ざした草地酪農の原点に回帰する時期ではないだろうか。

の飼料を放牧という飼養形態で利用する割合は減少しつつづけている。おそらく、その傾向には酪農経営上のそれなりの合理性があり、その合理性から判断された結果として、放牧減少につながっているのであろう。しかし、本当に北海道の放牧に経営上の問題点があるのだろうか。これが素朴な疑問の始まりである。

からっと晴れた青空の下、一面に緑の広がる草地で、乳牛がゆったりと牧草を食べている風景、これは、まさに北海道酪農の原点でもあると思う。酪農そのものの生産性向上への寄与だけでなく、北海道を代表する景観としても、放牧は重要な要素であるにちがいない。

このフォーラムでは、1) なぜ放牧が北海道で衰退したのか、2) 放牧でどのくらいの牛乳生産が出来るのか、3) 放牧をうまく経営に生かすには、どのような経営的要因に注意すべきなのか、4) そもそも、放牧を導入するには牛舎

周りにどの程度の草地をどの様に配置すべきなのか、そして、最後に、5) 放牧は「環境にやさしい」飼養形態なのかということも検討する。これらの検討を通して、北海道

の酪農場において「放牧を経営に生かすための必要条件」を具体的に明らかにすること、それがこのフォーラムの最終的なねらいである。

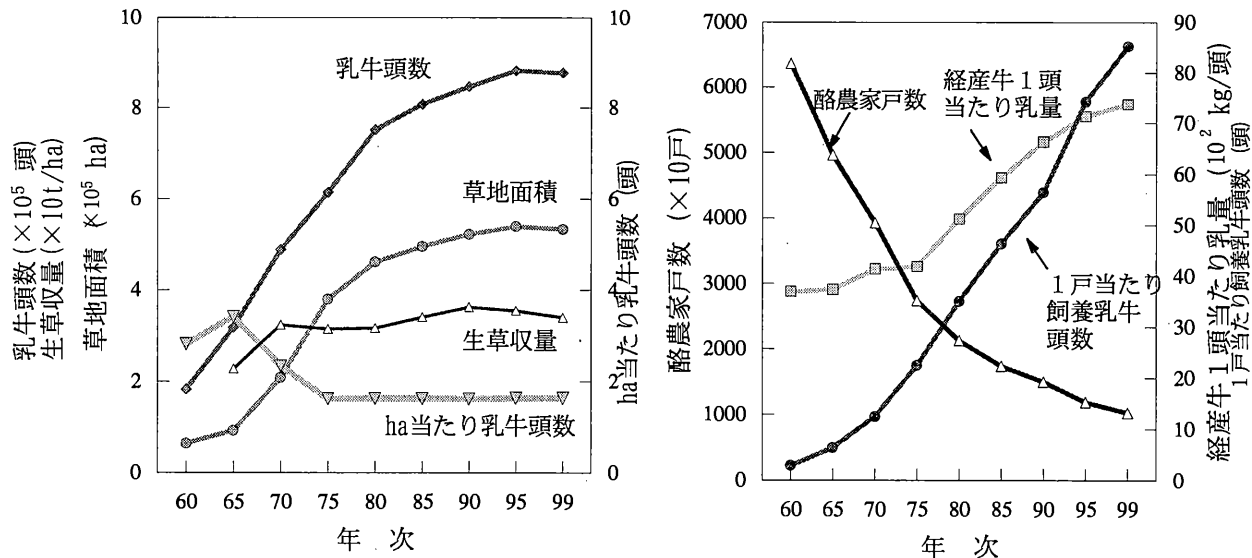


図1 乳牛頭数、草地面積、生草収量、haあたり乳牛頭数、酪農家戸数、1戸あたり飼養乳牛頭数、経産牛1頭あたり乳量の推移